

# チームで取り組んだ援助指導

—ある登校拒否の生徒を通して—

足利市立坂西中学校 茂木 宏亮

## 1.はじめに

登校拒否の生徒をかかえた教師や親のもつなやみは、深刻なものがある。

本校にも現在、登校拒否傾向を示し学校を欠席しがちな生徒が数名いる。これらの生徒に対する指導は、学校側、親の立場としても、むずかしいものがある。

今回、ここに紹介するのは、小学校5年生ごろから不登校児童となり、親と学校の協力で無事卒業し、中学校へ入学してきたK子の事例である。

K子の指導に小学校から連絡を受けた中学校側としては、この子を何とかしなくては?と考え、当時の校長や生徒指導主事の意見を参考にして、まわりの者がチームを組んで援助する方針を決めたことにはじまった。

その結果、入学して3年を経過、幾多の問題はあったが、学級担任の献身的な援助指導が功を奏し、無事進級し、今年は本人もめでたく卒業できる方向に進んでいる。将来は、技術を身につけ一人立ちしていきたい意向を持ち、各種学校へ進むべく努力をつづけている事例である。

## 2 問題行動の概要

学年	授業日数	欠席日数	出席日数
5年	243	87	156
6年	241	106	135

せず、小学校期においての出席日数と欠席日数は上記の表のとおりである。

中学校へ入学してから、本人はスクールバス通学区域になっているので、登校時に時間規制があり相当抵抗があったようである。入学直後は何とか登校している姿を見て学校側も喜んでいたが、5月16日以降から連続不登校となり6月、7月と無出席となってしまった。

担任が家庭訪問すると、頭痛・めまいがして朝起きられないという理由で欠席することが重なった。休んだ日は10～11時ごろに起き、朝食兼用の昼食をしパジャマのままで、テレビを見ていることが多く、ひどいときには、担任や母親が声をかけても、ふとんの中に入ったきり起きて来ないという状態を示すようになった。

そこで、学校側では、本人に対する援助指導を、どう取り組んでいったらよいかを検討し後述するような方法を試みたのである。

### 3. 家庭環境

父(45才)は地方公務員である。母(45才)は、近所の会社に勤めている。兄(21才)は、市内の商事会社に勤務、祖母(71才)は、家庭の留守番を引き受け、若いころに先立たれた夫の残した農地を耕作している。父は母にとっては2度目の夫であり、非常に無口で実直な人柄で、本人の不登校については、注意することはほとんどなく、日、祭日は、ほとんど家にいないというように関心を示さない。母は神経質とも言えるほど細かい人で、本人についてきびしく対処しようと努力している。祖母は本人に対してめんどうがよく、不登校の日の、本人の食事を用意してやっている。孫娘ということもあり、母親がわりのようなところもあり、甘やかしが目立ったようだ。兄は先夫の子だが本人はよく慕い信頼度も高く性格は明るい。兄弟の仲はよく本人の不登校については、心配し厳しくあたることもある。

### 4. 成育歴

熟産 体重2,900g 長女として生まれる。末っ子のため家族にかわいがられて育つ。幼少時は素直で親のいうことをよく聞く、手のかからない子であった。住居は山に近く静かで、小学校にも近く経済的にも比較的恵まれた家庭に育った。

小学校2年の時、200m程離れた県道沿いに、家を新築し引越ししたが「ここは車の音がうるさくて、夜ねむれない」と訴え、神経質になり出した。その後、元の静かな家で祖母と寝泊りしていたが、不登校がちとなつたので家族全員が元の家に戻り本人中心の生活となる。

### 5. 健康状態

体格は小柄で、細身である。体力はやや劣る。特にからだには異状なく少々かぜをひきやすい程度である。基本的生活習慣ができておらず、朝起きることが、今もなお、正常にできない状態である。

### 6. 趣味・部活動の状況

絵を描くこと。特にマンガは得意、クラブは合唱、部活はテニスに入部したが、途中で退部している。現在、入部していない。

### 7. 援助指導の経過

小学校5年のころから、不登校傾向が強くなつたが、原因は、はっきりしない。

この傾向が強くなってから、学校側で指導を加えたが効果がなく、県南児童相談所へ相談した。最初は週1回、母親と通って指導を受けていたが、途中から母親のみとなり中断してしまつた。学校としても本人を登校させようと強い姿勢で臨んだこと也有つたようだが、そうすればするほど、強い拒否反応を示し悪化する一方だったという。当時、本人は、口ぐせのように「死に

たい」と言っていたそうだ。気が落着くと母親と登校し、校長室で校長先生と算数などの学習をしていたが、教室へ足をすすめる姿勢は、いっさいなかったという。

中学校へ入学するに際して、小中連絡会で、K子についての連絡を受け、本校の前任の生徒指導主事が小学校を訪問し、本人に対する状況資料の収集をおこなった。

4月に入学してきた本人のようすを観察していると、当初登校する姿には別段変わりなく環境が変われば?と安心したもの、学級担任となったS教諭は、全職員に協力を依頼するとともに、両親や児童相談所担当者とも連携指導のための話し合いをおこなった。

## (1) 援助指導をおこなうための施策

### ア 友人からのはたらきかけを実施する。

学級編成の際、小学校時代の仲よし、Y子、A子を同クラスに所属させ、本人との連絡や世話を依頼した。それによって、担任と生徒のチームができ、K子に対する援助指導が継続できた。そのため、家にとじこもらず、友人と外出して遊ぶようになった。

### イ 学級担任、養護教諭、生徒指導主事との連携によるチーム活動の実施

家族や本人との意志疎通をはかるために連日交代で、家庭訪問を実施した。そして、お互いが気やすい気持ちで話しのできる雰囲気ができた。その後、担当者の話し合いで

・生徒指導主事は(本人の状況判断と治療方法を考える。)

・学級担任は(学級生徒への指導、友人からの援助指導依頼、本人への直接指導)

・養護教諭は(登校したときの本人の相手、本人の不安解消をはかるため、若さと、やしさを生かした指導で、これにあたる。)

以上のような役割分担を決め、活動が実施された。

### ウ 学年組織による、援助指導の実施

小人数でのチーム活動には限度がある。空時間を利用し曜日ごとに担当を決め、本人宅を訪問し、学習や話し相手をする。そして、より多くの先生との交流をはかり、本人の不安解消が少しでもできればと試みた。当初は、かなりの抵抗もあり、むづかしい面もあったが、母親の協力により交流がはかられ、かなり効果があったようである。

### エ 生徒指導主事と養護教諭による登下校の援助を実施

本人は、スクールバス通学であるが友人の誘いでもなかなか乗ろうとしない。本人が登校の意志がみえたときには、兄が学校まで送って来るが、母親から連絡があったときは、授業時数の関係から、生徒指導主事、養護教諭による、送迎がおこなわれた。

### オ 保健室での学習

登校はしたものの、学級へは足は向かない状態も見えたので、学校に慣れるまで、保健室で養護教諭が話し相手になったり、教科担当教諭の指示で学習をみたりした。友人が休み時間に来ての援助もあって、ややおちつきのある学習ができるようになった。

カ 学校行事への参加を呼びかける。

学級の仲間や担任から「行事に参加して友だちと共に活動するよう」に呼びかけた。1年に入學して、1学期は友人の援助も功を奏さず、18日の出席しかなかった。夏休み中に、相談機関での観察指導をするため「一時保護」を勧めたが、本人の強力な拒否で納得が得られず、入所することができなかつた。

2学期に入り、各機関との連携指導を試みたが、何とか学校だけでやってみようということで、家庭訪問を積極的に実施、担任を中心としたチームの活動が開始されると、10月から本人が登校の意志を示してきた。そこで、生徒指導主事、養護教諭との登下校の援助指導と保健室での学習がおこなわれた。しかし、これも安定せず欠席も重なりはじめたので、このままでは、進級認定もむずかしいことから、学年組織による指導が実施された。

また、文化祭も近いことから学校行事への参加を呼びかけ、本人の潜在意識には登校したい意志も見えたことで、学級新聞のイラストを依頼されると、これに応じるようになつた。

出席日数も、10月(9)11月(10)12月(12)と多くなってきた。また、この頃からバス通で、友人といっしょに登下校するようになってきた。

3学期には、出席日数(25)となり、学級の活動も仲間と共にできる日が多くなった。進級認定については、学年(74)の出席日数だったが、50数回に及ぶ、家庭訪問や訪問指導の回数を加え、3学期になって登校への意志も強いことから、進級が認められた。

2年になって、学級編成替えがあり、不安もあったのか欠席が多くなり、1学期では出席日数(3)であった。以前の援助指導も学年組織が変わり、スムーズに進まなかつた。担任S教諭も前年に引き続き、献身的な訪問活動の実施、友人からの援助にも本人の不安感は取り除かれず、初期の状態と同じようであった。しかし、夏休み中の呼び出し学習にも応じて担任の個人指導も受けるようになり、気もちも柔らいできた。2学期に入ると再登校が継続された。2学期には、宿泊訓練もあり(特に前年の文化祭、校内マラソン、スケート教室に参加している)この行事には是非参加させたいという担任の積極的な説得から、学級の仲間とも交流ができた。このため、2学期は出席日数(68)欠席日数(30)、3学期には出席(31)欠席(28)学年計(101)欠席(142)となった。進級認定は欠席が多いが、学校へ出てくるようになった意志が尊重され、進級が認められた。

3年生になると、4月には修学旅行があり、本人も学級のグループ活動には積極的になった。この頃から一日一日と笑顔も見え、明るい学校生活を送るようになった。

1学期、出席(62)欠席(24)、1学期の後半、自分の進路についても考えるようになり、学習の遅れをとり戻すためにS教諭との対人学習が、夏休み中に実施された。1日に1~2時間程度で15日の学習がおこなわれた。

2学期では、9月当初まで身体の工合が悪いので心配したが10月、11月、12月と

計 出席(50)欠席(34) 1, 2学期 計で出席(112)欠席(34)となっている。

近ごろでは、友人ともうち溶け合い、職員室へ来て多くの職員からも声をかけられ、本人も生きがいを感じているようだ。卒業後は、和洋裁の技術を身につけるため、各種学校への進学を目標として、がんばっている。

## 8 ま と め

学級担任を中心とした、生徒とのチーム、小学教師とのチーム、学年組織のチームとして取り組んだ。この援助指導において、この3年間に見せた本人の変容の要素は、何といっても献身的な学級担任の姿勢と家族の協力があつての結果である。

第一に、担任が連日欠かさぬ家庭訪問で、本人や家族との意志疎通ができたこと。また、保健室学習では、若い養護教諭が、本人の不安解消を、あせらずにおこなったことである。

第二に、チームにより多角的な方向からの指導が、徹底されていたこと。友人による援助は、本人の人格を無視したり、傷つけまいとする心が学級全体の思いやりの心に結び、本人が学級へ入っていくのにも、抵抗がなかったことである。また、教師も小人数にまかせずに種々の立場から声をかけ、縄張り意識を捨てての協力体制ができたことである。

第三に、家庭では基本的生活のリズムを整えるため、起床時刻の指導徹底に協力したことなどが挙げられる。

## 評

最近増加傾向の見られる「不登校生徒」に対する指導実践記録です。これは市内中学校生徒指導主事研修会での事例研究の中からまとめた二事例です。したがって、各校の取り組みを生徒指導主事の立場でまとめたものです。

登校拒否症にも種々のタイプがあり、その指導援助は一様ではありません。しかしその背景を考えると、家庭的な問題（家族関係、親子関係等）が主な要因となっているようです。

その子の立ち直りを考える時、この報告にみられるように「この子を何とかしなくては」という担任の熱い思いがあり、それを支える学校長を中心とした、学校、学年の組織的な取り組みが不可欠であり、継続的な相談的かかわりが必要であります。そこから関係機関との連携、保護者との強い信頼関係も生まれ、何よりその子との好ましい人間関係が育つものと思います。